

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (16)

—— А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀*

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (16)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

The Northern Campaign aroused the proletariat in the new revolutionary center of Wuhan to an even greater degree. The worker movement spread to nearly all the plants and factories in Hankou.

In Canton, the working class movement faced weak bourgeoisie, politically divided. On the Yangzi River the working class movement encountered stronger bourgeoisie of China's main trade artery. This bourgeoisie quickly organized to resist the workers.

1926年の夏に始まった中国統一のための戦い、北伐は労働者、農民の強力な支持を得て、急速に戦果をあげ、早くも揚子江流域に進出した。だが、当地の場合、広東地域とは異なり、欧米列強の中国進出の最重要地点である上海をはじめ、各地に列強の租界が存在し、また、有力な中国のブジョアジーも上海地区に存在していた。

1927年4月、遂に、国共合作の統一戦線は分裂し、中国大陸の覇権をめぐる、いつ果てるとも知れない国共内戦が始まるのである。

以下はこの作戦の軍事顧問、А.И. Черепанов の回想録《Записки Военного Советника в Китае》1976 НАУКА の523頁～546頁の全訳である。

国民革命軍上海へ進撃

蒋介石は浙江省に突入すると、当然のことながら、自分の生まれ故郷では、反動集団内部の以前からの関係

を利用することができると期待した。だが、浙江省内では次のような状況が起こっていた。国民革命軍が第二次南昌戦線に失敗した後、当地の省長は浙江省の独立を宣言した。しかし、恐らく読者はまだ記憶しているだろうが、決戦の時に九江を離脱した周鳳岐の師団が浙江省に到着した。その師団はこの地で、陳儀の地方師団と連合した。就任したばかりの省長は打倒され、自分の部隊と共に南方へ敗走した。周鳳岐の部隊は国民革命軍第26軍に、陳儀の部隊は第19軍になった。《雨後の筍のように》新しい軍が次々と生まれた。

安徽省の状況もまた、かなり不確定であった。唐生智は南昌作戦では、大した貢献をせず、また軍閥の陳調元軍に対する攻撃も時機を失したものであった。そして、彼を安徽省へ押し返した。陳調元は軍閥張宗昌の大きな集団、《山東閥》と連係を保っていた。安徽省の南部では、国民革命軍の広西第7軍と38軍が徐々に地盤を固めてきた。

1926年11月、12月に湖北省西部の状況が明らかになってきた。呉佩孚の残存勢力、5個師団がここに踏みとどまっていた。さらに、四川の楊森將軍指揮下の約2万の部隊がここに駐在していた。楊森將軍の職務は

1995年9月18日受理

* 一般科

第20軍の軍長ではあったが、国民革命軍に対して彼が自分で並べた職責を実行する気は全くなかった。結局、唐生智第8軍の1個師団が安徽省西部の敵を一掃するために派遣された時、楊森將軍はまだ完全にはとどめを刺されていない呉佩孚の部隊と連合し、自分の《古巢》である四川へ戻った。

このような全般的な軍事状況の下で、蒋介石は東方へ急進した。彼は、軍が江西での極めて激しい戦闘の後、休息を是非とも必要としていることを無視した。死傷者が兵員の30~40%に達した軍がいくつかあった。指揮官の70%が死傷者となった。部隊には補給品もなければ、暖かい軍服も確保されていなかった。

蒋介石は《浙江人》を支持するという彼の命令が不可欠なものであることを裏付けるために、11月末、第1軍第1師団を南昌から浙江省へ派遣した。さらにこの師団には、新たに編成された2個連隊と3門の大砲を有する山砲中隊が加えられていた(全体で5個連隊、兵員6千名)。この作戦の結果は、蒋介石による他の多くの独断的で果敢な戦略と同様、惨たんたるものであった。

孫伝芳は国民革命軍の部隊を精力的に撃退した。1月9日、国民革命軍は戦うことなく蕪州を放棄せざるを得なかった。だが、その後、孫伝芳の攻撃は不活発となり、彼はその月の半ば蘭溪を占領したにすぎなかった。国民革命軍の兵士の多くは病気になるたり、逃亡した。蕪州への増援部隊として送られた第2師団は上記の理由で、千人以上の兵士を失った。また別の師団は完全な士気喪失のため、武装解除をせざるを得ない状況になった。

戦線では、革命によって得たもの全てが真に失われる状況が生じていた。軍閥陣営はお互いの対立によって分裂していたが、革命の深化という脅威に直面し、帝国主義者である調停者の助けを得て、彼らがある程度、団結することができたことで、危険は一層増大した。孫伝芳の残存部隊に対して、山東軍閥張宗昌が積極的に援助を行なったならば、それは直接の脅威となったであろう。

こうした状況では、二つの悪のうち小さい方を選ばざるを得なかった。顧問達は原則的には、東方へ直ちに侵攻することに反対であったが、彼らは状況を救わねばならなかった。ブリュヘルに参加の下に、揚子江下流域に存在する敵軍の、いわゆる一掃計画が作成された。

その計画は、今までにブリュヘルによって作られた

戦略計画と同様に、個々の戦線についてもまた、全体についても詳細に状況分析がなされていた。この計画全体にわたるコンセプトは以下のようなものであった。

主力軍は江西省東部一浙江省西部の地域で進撃：江西省の北部と湖北省の南東部に配置されている部隊には、敵の安徽省のグループを牽制する任務が与えられた。

唐生智は北京—漢口間の鉄道の南部分と湖北省の北部を占拠していたので、積極的に同様の任務遂行に参加せざるを得ず、さらに、湖南省の軍閥軍も牽制しなければならなかった。

馮玉祥は積極的な役割を果たすことになった。彼は2月10日までに、隴海線に沿って前進し、洛陽—鄭州地区を攻撃しなければならなかった。こうすれば、彼は武漢にある革命センター及び、河南省にいる敵の中で国民革命軍に加わろうと思っていた諸部隊と連絡をとることができたであろう。その後、馮玉祥は軍の一部を割いて敵の側面である徐州を攻撃しなければならなかった。だが、主力は最も強力な軍閥グループ—奉天派に対して集中せざるを得なかった。馮玉祥の国民軍と国民革命軍は北京で合流することになっていた。

戦略計画によると、国民革命軍は揚子江に沿ってその兩岸を進むことになっていた。程潛指揮下の右岸グループは彼直属の第6軍、魯滌平の第2軍と賀耀組の第40軍で編成されていた。

蒋介石はこれらの部隊に東方へ進撃するよう命令した。このグループの兵員は2万5千人以上であった。

左岸のグループに入っていたのは李宗仁の第7軍(彼は左岸軍総指揮であった)、それ以外に第10軍、15軍、33軍であり、全部で4万人以上であった。

安徽省で2万の兵力を有する司令官陳調元の態度は揺れ動いており、彼の忠誠心を当てにすることはできなかった。左岸軍全体の主要な任務は、山東軍閥軍が揚子江を渡って孫伝芳の支援にやって来るのを阻止することにあった。

主要攻撃目標地は杭州—余杭地区となっていた。中央戦区には、すでに述べた蒋介石の2個師団に加えて、さらに第11軍の2個師団が投入された。

国民革命軍の《定員表》では軍の数は大変多かった。外見上、これらは全て極めて堂々たるものであった。国民革命軍司令部はこれによって、敵と住民に自分達の兵力を過大に見せかけることを狙った。実際には、国民革命軍の戦闘力ははなはだ不十分であった。攻撃命

令の中では、この戦闘能力は詳細に検討された。

国民革命軍の主要な軍の兵力は以下の様であった：第1軍—2千(中央戦区)、第6軍—2千、第3軍—3千弱、第4軍—戦闘力のある古参兵3千5百と補充兵2千5百、第2軍—極めて当てにならない6千。

唐生智の同調者及び《保定派》のメンバーは国民革命軍の構成分子であった。ブリュヘルの評価によると、彼らは国民党や国民政府との関係を利用して、個人的な利益や高い地位を獲得した。勿論、このことは全ての昨日までの全軍閥達に対して当てはめても間違いないであろう。ともかく、7千の兵力を持つ第7軍は軍事行動を続けたいという気持を少しも表わさなかった。第8軍は2万5千〜3万の兵力を持っていたが、戦闘能力を有するものはわずか1万5千にすぎなかった。

急ごしらえの、編成されたばかりの軍に関しては、事態は一層悪かった。第19軍と第26軍に関してはすでに述べた。第9軍と第10軍は湖北省西部で敗北を喫し、湖南省常德地区に退却した。第10軍は貴州軍で構成されていた；第15軍は湖北師団を改編したもので、その兵力に関する情報は極めて矛盾したものであった。第40軍(兵員8千弱)は国民革命軍に移ってきた湖南師団を基礎として編成された。

この作戦計画では、重要な意義は東部戦区の部隊に与えられた。もっとも、これらの部隊には多数の傷病兵や脱走兵がいた。総司令部の予備兵力となったのは朱培徳の第3軍で、この部隊は九江—南昌間の鉄道に沿って少し前に戦闘があった地区に配備されていた。第3軍に大急ぎで兵力が補充された。

中央戦区を指揮していたのは広西軍閥の白崇禧で、彼は蒋介石の参謀長になっていた。彼は蒋介石の指令に従って、東方戦区の部隊が集結する前に、贛州—蘭溪方面に対して決定的な攻撃を展開し、重要な打撃を与えねばならなかった(第1、第2、第21師団)；同時に、第26軍は金華に移動し、第2軍は左翼になった。彼の考えは相変わらず以下のものであった：自分の直属の部隊が他のどの部隊よりも先に上海へ突入すること。

命令によって、部隊は1月20日までに出発できる状況を整えなければならなかった。だが、粗末な通信手段やその他の原因で作戦の開始が遅れた。10日間、浙江戦線は静かであった。その間、軍閥軍は南湖—台州地区で、主力から孤立した国民革命軍第19軍を撃破した。

浙江省で攻撃の準備をしていた部隊は国民革命軍の

中で、わずかな部分を占めていたにすぎなかった。1月の半ばまでに、国民革命軍の兵員は約18万となり、それは機関銃660、大砲290、擲弾筒180を所有していた。それは堂々たる軍隊であった。しかしながら、我々がすでに見たように、主要な攻撃地区には兵力が少なく、その上、最小限必要な量の弾薬さえ持っていなかった。作戦を前にして、ライフル1丁につき平均150発、また大砲1門につき50〜57発が割り当てられた。

孫伝芳は自分のグループを5軍に分ける程の大きさではあったが、実際には、彼の方も国民革命軍に対抗できる力ではなかった。実際のところ、南京—上海間の鉄道に沿って集結していたライバルの山東軍の圧力が主要な理由で、彼は攻撃に出ざるを得なかった。

実際には、杭州—上海戦区には孫伝芳の第7師団の残存部隊のみが存在しており、さらに、2個師団が常州と宜興に駐在していた一全体で4万5千であった。彼が前線に投入できたのは2万5千以下であり、残りの部隊は後方守備のために必要であった。

1927年1月初旬、上海で5個師団が編成されたが、そのうちの2個師団はあてにできなかった：国民革命軍へ寝返る用意があった。第6独立旅団も動揺していた。上海における極めて強力なストライキ運動の展開と相まって、このことは敵方にとって後方からの大きな脅威となっていた。

蒋介石個人による上海占領の恐れが一層現実的なものになった。忘れてならないのは、この軍事行動全てが共産党の指導する大衆や統一戦線の左翼側と、右翼の中でますます非情となってきた潜在的な反動派側との間の激しい政治闘争を背景に展開したものだということである。

東方戦区の部隊の顧問であった私は武漢、広州、その他革命の主要な場所で起こった事件についての情報を得ていなかった。それでも私には次のことがわかっていて、蒋介石に忠実な軍隊が上海を占拠することは革命にとってとても危険であると、ポロジンが考えていた。国民革命軍の部隊はブリュヘルの作成した作戦計画に基づいて、東方戦線に近づいて行った。部隊が集結するにつれて、軍閥軍による強烈な攻撃の脅威は弱まっていった。白崇禧の中央グループが始めた攻撃は順調に展開し始めた。このような状況下で、私は今でも正しいと思っている立場をとった。部隊が上海へ進撃するのをできる限り引き伸ばそうとした。だが、白崇禧が最初に上海へ到着する可能性があることを知って、私はあらゆる手をつくしてそれを遅らせようと努

めた。

私は何応欽の際限のない功名心を利用しようとした。彼は誰であろうと自分より先に行かせたくなかった。

私が置かれた状況は極めて厳しいものだった。私が直接顧問となっている何応欽はますます露骨に、反革命的な気持を表わし始めた。第1福建師団が武装解除された後、福建を通過する道路を東路軍が自由に通れるようになった時、彼はあたかも人間が変わったかのようであった。彼は得意の絶頂にあり、大出世の道を進んでいると感じた。最初、彼は《我々は帝国主義と北方軍閥に反対である》と、口ごもりながらも言っていたが、その後、軍隊の中でも住民の中でも、政治的な活動を全く止めてしまった。

何応欽のこの気持に対してどう対処すべきか、私はブリュヘルとボロジンに質問した。しかし、いかなる指示も届かなかった。恐らく、私の電報を差し止める命令が出ていたのであろう。何故ならば、後に私は公文書の中でそれを探したが、見当らなかった。私は東方戦区で起こっている一連の事柄を、指導者達に知らせることができなかつただけではなく、私自身も最も重要な情報源から遠ざけられていた。

耳に入って来る噂によって、私は新しい状況下で《中山艦事件》が再発することを予想することはできた。私の全般的な状況判断の正しさは、ブリュヘルの参謀長である А.Ч. Благодатов からの電報によって、ある程度裏付けられた：《白崇禧のグループは全般的な作戦上の意義において有害な、単独攻撃を行おうと決意している……》

今起こりつつある事件に対する私の理解を、白崇禧の軍隊付きになっている顧問の В. Панюков と Василевич に伝えようとした。慎重に作成された電文の中で、私は攻撃を急がない方がいいこと、そしてむしろ、恐らく退却する方がもっといいだろうということを彼らに示唆しようとした。だが、彼らは私の警告を正しく理解することができなかった。

後でわかったことだが、Панюков は、自分は白崇禧に軍人としての能力があるとは容易に信じない、という風に自分の意見を述べていた。問題は、陳炯明と闘った第二次東征の際に、Панюков が敗北を喫した第3師団付きであったことである。その上、私が福建省にいるので状況を正しく判断することができない、と Панюков は考えた。彼はこの際、単に軍事作戦のみを考慮に入れ、政治的、つまり物事の本質を考えていなかった。

た。

1月中旬頃、東路軍は次のように配置されていた：第1軍(8千)—金華、第14軍(6千)—蘇州、第17軍(4千、予備軍)—温州。かくて総員1万8千、64丁の機関銃、21門の大砲、13門の擲弾筒があった。命令によって、このグループは1月中旬に出撃することになっていた。その際、主力(第3、第14師団と14軍の1個師団—兵員9千)は延平—常山に向かって移動し、14軍の他の2個師団(兵員5千)は海岸に沿って温州に向かった。とりわけ補給が無かったために、攻撃は極めてゆっくり展開した。2月4日、何応欽は私の同意なしに、軍事上の観点からみると馬鹿げた行動をとった：旅団の一つを武装解除し、必要もないのに優秀な部隊を失った。我々の軍隊と接触した敵はいなかったにも拘らず、東路軍は1927年2月の終りによりやく杭州地区に集結した。

ここで私は少し《脱線》する許しを読者に乞いたい。尊敬すべき読者が軍事作戦の終りのない記述や、部隊の一覧表及びそれらの集結地点の記述にうんざりするのを、私は心から恐れている。当時の雰囲気伝えると私には思える、一つの面白いエピソードを語ることをお許し願いたい。そのエピソードをこのように名づけよう：《乗りかかった船》

杭州で我々はホテルに滞在した。ある時、たまたまアメリカ人の実業家達と同じテーブルに居合わせた。《皆さん方はロシアの軍人ですか》—我々がこのような質問を耳にするのは初めてではなかった。中国で発行されている英語の新聞雑誌は顧問のことを、飽きることなく長々と伝えていた。我々はソビエトの新聞の特派員だと名のつた。

会話が始めると、私はジャーナリストとしての活動の特徴というテーマについて、創作して話さねばならなかった。我々が階段を昇って部屋に戻る途中、Иван Василевич は私の腰を抱いて、心から感嘆して言った：《君は全くの俳優だね、Саша。劇作家のように話を作り上げる》—《以前にも経験したことがあるよ》—私はぼそぼそ言った。《一寸待って、本当？ そう言えば、君が北京からやって来た時、ある人が私達に話してくれた……Саша、隠さないで君の経験をくわしく話してくれ》—《よろしい、そうしよう》

我々—Василевич、Панюков、Шевалдин と私—はロビーでゆったり座った。そして、私は友人達に次のことを語った。

それは1923年の夏、私が北京に到着してすぐのこと

であった。駆け出しの赤い外交官達は見事な演説の才能を備えていた。革命、つまり声のかれるほどの党の敵との論争、兵士会議、非法法会議がそれを教えてくれた。だが、覚え書きや外交文書の作成、外交書簡の慣行に関してはうまくいかなかった。ソ連の詩人であり軍人であるラトビア人 Эйдеман の有名な言葉のように、多くの我々同志達にとっては《白軍の將軍 Деникин と戦う方が数字の鉄条網を突破するよりもやさしく、また弾丸で地面を縫う方が書類を下手な字で縫うよりやさしい》。

この状況から、大使館員のかかなりのパーセンテージを占めていたのは、外交のエチケットの奥義に見事に通じている、旧社会の典型的な知識人であったという事実が生じた。大使館付武官は我々（下っ端）にどのようにつきか教える責任があった。だが、彼自身もこの仕事を始めたばかりであった。我々は自分自身で方針を決定し、対処しなければならなかった。結局、我々は外交界の各種各様の奥義をマスターし、さらに多くの我々独自のもの—明確さとスピードを加えた。最初のうちはかなり苦労だった。

旧社会の知識人大使館員は古典文学の教育を受けていた：プーシキン、ツルゲーネフ、ブローク。彼らは幼少の時から高尚な文学を熱愛し、それを神のように崇拜していた。彼らは革命以前と同じように、文学の夕べや素人演劇を頻繁に行なった。ある時、この種の《催し》で私は脚光を浴びた。象が食器店に入って来たように、私は伝統的な文学の価値観をこわし、突然、参加者に激情の嵐を引き起こした。

その夕べの集いはソ連演劇についてであった。我々の英語の通訳が解説をした。私が少なからず驚いたことには、彼は何度も私の名前をあげた。彼は大体次のように話した：《私はプロではなく単なるアマチュアです。私は北京にいるのでソ連演劇の新作についてよく知らない。だが、もう心配はいらない。モスクワからやって来た劇作家 Александр Иванович Черепанов がきっと、私の足りないところを補ってくれるでしょう……》。

これは一体どうしたことか。大使館付き武官 А.И. Геккер は本当の《陰謀家》ではなかった。彼は大使館内で我々を東洋学専攻の学生として紹介することに決めた。だが、同時に必要もないのに、各々に専門を割り当てたので事態を複雑にさせた。Терешатов は医者、Герман は考古学者、私は劇作家として紹介された。遺憾ながら、彼は私の写真を見て、何故だか私が作家に

似ていると思った。今や、この《押しつけられた劇作家》は自分への讃歌を聞いて、生きた心地がしなかった。

私はソ連の作家の演劇を今までに何か見たかどうか懸命に思い出そうとした。不意に一つの考えが浮かんだ：逃げ出そう！ だが、私はドアから最も遠い所に坐っていた。その上、良心がこれを許さなかった。そうこうするうちに、退屈な発言が始まった。議長は人を演壇へ文字通り引っ張りあげた。私はできることなら難を避けたいと思っていた。丁度その時、Геккер のメモを受け取った。

彼はすっかり外交官の服装をし、重々しく坐っていた。ぼさぼさの髪も無理になでつけられていた。彼は私に是非とも発言をするようにと言った。

私はまるで、同じ村の若者に追いつめられて窮地に立ち、打ちのめされようとしている村の若者に似ていた。私は突然、Демьян Бедный の本を手を持っていることに気づいた。もしこうしたらどうだろう、と心の中で思った。そして、私は発言を求め、プーシキンの詩の引用から話を始めた：

人生の興奮のためではなく、金儲けのためではなく、
戦いのためではなく、
我々が生まれたのは、靈感のため、純潔な言葉と祈りのために……

若い時私はこの詩句がとても好きであった。何故なら、私自身、自分を詩人だと思っていたからである。私は作詩のきまりも知らずに体をなさない詩を作った。ところで、私はプーシキン、《見知らぬ女》《雪の女王》を書いたブローク、さらにナードソンを《芸術のための芸術》の代表者として挙げた。彼らと対立するものとして Демьян を持ち出した。私は彼の詩《私の詩》から彼の言葉を引用した。その中で彼の声は戦闘中のラッパになっていた。

私の詩は華麗な外衣をまとっていない
きらびやかな舞台の上ではなく、《純粋な大衆》を前にしては、感激して声が出ない……

次に《歌の別れ》を続けた。

私がやさしい横笛で奏でたのはナイチンゲールのさえずりではない……

私の詩は横笛ではなく、ラッパだ……

私は貴族の詩人を手厳しく批判し、プロレタリア詩人を賞賛した。最後にまた、Демьян の詩句を引用して私の発言を終えた。

最後に、我々の戦斧を貴族の細身の剣と交えた。

私は最も神聖な、文学の巨匠の尊厳を冒し、聴衆を甚く刺激した。今思うと、当時の私の立場は幼稚なものだったが、当時は、Бедныや Маяковский を擁護しなければならなかった。私は特に、聴衆の半分である女性達に不安を与えた。インテリ出身の、ソ連大使館員の夫人達は当時もうずっと以前にギムナジウムを終え、子供を育て、革命の年月を体験したが、今でも Надсон の詩の外面的な美しさに涙を流した：

たとえ祭壇が壊されても相変わらず火は燃えている
たとえバラは切られても、花は相変わらず咲いている

たとえハーブはうちこわれても、和音は相変わらず
むせび泣いている

私が疲労困憊して自分の元の席に坐るや否や、皆が一度にしゃべり始めた。文学の夕べで全く口を開いたことのなかった人でさえも、しゃべり始めた。特に熱烈に雄弁をふるったのは元総督の息子である、大使館員の《衣裳係》であった。彼は貴族風の話し方で Блок を擁護した：《はたして、このような詩を非難するのを許すことができようか。Блок は雪の女王のイメージの中で、母なるロシアとロシア人民を歌いあげている……》好都合にも、この人の外見と彼の発言の内容は全く相反したものであった：彼はレセプションへ行こうとして、香水をつけ、化粧をし、髪にパーマさえかけ、外交官の礼服を着ていた。

激情が頂点に達した時、その集いに出席していた党員達は書記官の一人に、色々な発言をまとめるよう委託した。彼はとても賢明且つ丁寧に発言し、とりわけ《衣裳係》の西欧的なよそおいと、彼の発言の中の狭量な国粹主義との不一致を問題にした。私がホールから抜け出そうとした時、その集いに参加した女性の一人がげんこつで私の背中を痛いほどたたいた：《私がプーシキンに代ってあなたにお見舞いしますよ》。ともかく、私は劇作家の一員として通した。だが何年か経って、私はあの時たたかれたのは当然だと悟った。

杭州に来ていた仲間達は私の話を聞いて、大いにおもしろがった。

さてここで、国民革命軍のその後の作戦行動へ話を移そう。

1月末に白崇禧は攻撃に転じた。1月29日、蘭溪の西20 kmの地点で、孫伝芳の主力(4個師団)と16時間に及ぶ戦闘があった。軍閥軍は死傷者や捕虜で2千人を失い、機関銃8丁、大砲3門を捕獲された。撃滅した敵を追撃する作戦はすぐには実行されなかった；

それどころか、軍の移動さえ行なわれ、その際、戦場の混乱のせいで第2師団の2個連隊は友軍に銃撃された。これはすべて白崇禧の神経過敏の所為であった。それでも勝利は重要な意味を持っていた。

大喜びで蒋介石は2月2日、次の命令を出した。1か月以内に《東方問題》を解決し、その後、津浦線に沿って北上すること。勿論、この指令は複雑な状況を考慮したものではなかった。白崇禧が前進することは、孫伝芳が一週間のうちに再び攻撃に転ずることを意味していた。その時、彼の2個師団は紹興に、残り2個師団は安徽省に退却していた。2月3日、嚴州を再び占拠した。

司令部はこの地点の占拠をもって攻撃を中止し、東部方面の部隊の到着を待つよう命令を発した。だが、白崇禧には野心的な計画があった。国民革命軍第26軍及び第21師団が浦江地区で軍閥軍の一部を包囲し、それを無力化した。2月17日に杭州が占拠され、2月28日に桐廬地区で孫伝芳軍の残存部隊が再び撃破された。その一部は上海と南京に退却し、一部は国民革命軍側に移った。桐廬—杭州地区の戦闘で、1万～1万4千人が捕虜となり、さらに、紹興地区では、孫伝芳の親衛隊一彼の警備旅団が包囲され、武装解除された。2月21日、東方戦区の軍の一部である第17軍は船で大きな港、寧波に到着し、そこで8千人を捕虜にした。これらの成功をおさめた後、白崇禧は上海に4個師団を保持していた。それらの総員は1万5千人以上で、機関銃94丁、大砲50門、擲弾筒13門を有していた。嚴州—蘭溪地区で孫伝芳が敗北した結果、丁度タイミングよく、すでに述べた安徽省の督弁、陳調元は自分の盟主を変え、正式に国民革命軍に加わり、第33軍の軍長となった。

国民革命軍が成功する決定的な条件となったのは、山東軍閥が孫伝芳を支持しなくなり、浙江省の北部へ自分の部隊を撤退させ、国民革命軍が敵をやっつけるのにまかせたということである。張宗昌は作戦の進行に干渉しなかった。なぜならば、孫伝芳が自分の方から上海と南京を山東軍閥に与えようとせず、それどころか、彼の管轄下にある地域で奉天派の通貨を流通させることを厳禁したからであった。

だが、孫伝芳が粉碎されると、山東軍閥は軍事行動の過程に介入せざるを得なくなった。今や、彼らの目的は江西省と安徽省を獲得し、孫伝芳の残存部隊と一緒に陳調元を国民革命軍に對し立ち上がらせ、一方、自分は揚子江の北部にしっかりと根をおろすことであ

た。1927年2月23日、山東軍が南京を占領し、そこに2万5千〜4万の軍隊が集結した。

南京へあわてて移動して来たのは Начев 将軍の悪名高い第65師団であった。この連中は白兵軍兵士の中で、満州へ逃げ出し、その後、傭兵として軍閥軍に加わった、祖国への無節操な裏切者であった。

1927年2月の終り、南京を攻撃していたのは、第2、第6、第40軍であった。第40軍は賀耀組の師団を基盤にして編成されたものであった。国民革命軍の左岸のグループ(兵員3万5千〜4万)は優勢な敵軍に直面した：蚌埠に1万〜1万5千の山東軍閥軍が防衛していた。徐州地区には4万ほどの軍隊が集結していた。軍閥軍のかなりの部分が昨日までの土匪であり、戦闘能力が低かった。

右岸のグループは第6、第40軍の1万5千の兵員で、太平地区に進撃した。

その間に東方戦区の以前の部隊は急いで南京地区へ移された。国民革命軍第2軍と共に我々は溧陽―宜興地区の2万7千の敵軍と戦闘を展開した。

その頃、白崇禧の率いる国民革命軍中央グループは上海地区で動きがとれなくなっていた。ここでは、完全に士気を失った孫伝芳軍は山東軍閥軍の Bashuzi 軍に代っていた。それは総勢わずか1万で、北海艦隊が山東省から上海に到着するのを待っていた。しかしながら、雨の後一面に氾濫したクリークが国民革命軍の行く手を阻んだ。クリークは上海周辺の地域に数多くあった。敵軍は松江―蘇州戦線で抵抗していた。以前の孫伝芳軍は揚子江の左岸に移された。

その間に、上海で極めて重大な事件が起っていた。上海の労働者階級は中国共産党の指導の下に、中国のこの何百万という巨大な港であり、帝国主義の最も重要な前進基地を国民革命軍が到着する前に、自分達の力で解放しようと努めていた。これは流血をともなった、ヒロイズムに満ちた大衆闘争であった。闘いの先頭に立ったのはいつもきまって共産党員であった。だが、当時の中国共産党指導部は明らかに、戦術的に不用意であった。

国民革命軍の中で革命に誠実な部隊の側から見ると、上海のプロレタリアートの支持を確保することは事実上、不可能だった。このような状況の下で時期尚早の行動をおし進めると、軍閥や帝国主義の支持を得た右派によって、上海の労働者の力が壊滅させられる可能性があった。そのことは実際に間もなく起こった。それにもかかわらず、蜂起した労働者達を援助するこ

となく放置し、彼らが山東軍閥に撃滅されるのを見逃すことはできなかった。

顧問達は血なまぐさいテロから上海の民衆を護るために、できることは何でもやろうとした。ブリュヘルが南昌から電報を送り、1927年2月25日に上海及び南京に出撃するよう要請したことは特に、そのことを示している。資料の重要性を考慮して、私はその全文を引用する：《Никитин から Бородин, Пliche, Горайский, Зеброский, Зигон, Палло, Войнич へ：

1) 国民革命軍が上海へ近付くことを予測してゼネストが宣言され、それはまさに蜂起に転化しようとしている。ストライキは帝国主義者と孫伝芳軍閥に反対するというスローガンの下に行なわれている。我が軍の上海への接近が遅れると、労働者が壊滅する恐れがある。我々の上海への進撃を早めねばならない。2) 白崇禧やその他の将軍達に、敵の無秩序な瞬間を利用する必要性を説明し、上海攻撃をただちに行なうよう説得しなければならない。どんなことがあっても、これを行なうのはストライキ参加者を助けなければならないからだ、と言ってはならない。というのは、彼ら(将軍達)は上海の労働者の力を弱めることを願って、これをやろうとしないのではないかと私は恐れている。この進撃指令は総司令官から出されるであろう。3) 全般的な作戦計画は2日後に出されるであろう。今日、総司令官が次のような決定をした：白崇禧将軍のグループ全員は上海を占拠すること。但し、同時にその一部を蘇州占拠にあてる。何応欽のグループは杭州地区を出発して、鎮江と南京に進撃すること。第7軍と第9軍はその一部を守備隊として寧波地区に残し、主力を杭州地区へ移動させること。それは後で、上海あるいは南京と鎮江で利用される。4) 第2軍は右岸のグループの司令官程潜の指揮の下に、寧波や広徳を通して南京に向かう。5) 今や、蘇州及び上海への攻撃を白崇禧のグループで始めるように。白崇禧のグループの後方を確保するために、第2軍の一部を杭州の北方、広徳方面に前進させる。この部隊は初めのうちは、宜興の方面から白崇禧のグループを護っていたが、杭州地区の何応欽がこの方面に接近するにつれて、太湖から東に向かう敵の攻撃の危険は全くなくなる。Галин》。

このブリュヘルの計画は、よく知られているように、完全には実行されなかった。特に、決定的な任務を与えられていた白崇禧のグループは上海から離れた所に止まり、上海の反動派が蜂起した労働者をやつつける

のを明らかに待っていた。だが、労働者の方は思った以上に強力であった。上海は彼らの手に移った。国民革命軍は南京付近で自己の責務を成功裏にやりとげた。ある程度ブリュヘルの影響で、当時最も革命的な武漢政府に忠実な程潜グループだけに南京を占拠する権利が与えられた。

何応欽の、その時まで政治的な面では信頼できなかった第3、第14師団は上海—南京鉄道を遮断するとかの理由で、宜興—鎮江に派遣された。だが、実際は、彼らに南京占拠の一番乗りをさせないためであった。程潜を援護するために第2軍が送られ、3月15日に決定的な攻撃が始まり、成功裏に終わった。

何応欽の第3、第14師団は南京解放の一兩日後にそこへ到着し、市の空き地に陣取った。その時、程潜にはこの2個師団を武装解除する絶好のチャンスがあった。しかし、好機を逃してしまった。一方、私は自分を不利な状況に追いやることになったのだが、何応欽の部隊に、このような状況下で消極的にならないよう助言した。彼らは市の最重要地点を占拠し、極めて熱心に戦利品を集め始め、文字通り程潜の目の前で、最も高価な軍の財産を盗んだ。程潜はこの問題を解決するために数回私の所へやって来た。

しかし、私自身は当時、事実上、囚人同然の状態にあった。何応欽は護衛と称して私にスパイを数人つけた。市に残っている山東軍閥軍や孫伝芳軍の残存部隊による危害から私を守るとか称して、彼は文字通り、どこでも私の後について来た。私は何応欽のいないところで他の指揮官達と会うことができなかった。

他の顧問達は心から私の生命のことを心配し、《中山艦事件首謀者達》が私を毒殺する可能性があるかと警告した。何応欽の軍隊が東方戦区から移された後、私は同志達と再会できて非常にうれしかった。というのは、私は長い間友人から引き離されており、極めて複雑な状況について彼らと意見を交換することができなかった。今や、私はВ. Панников, Иван Василевич, В.А. Шевалинに、上海をめぐる展開しつつある事件の政治的な意味について自分の考えを述べることができた。残念ながら、当時、私の言ったことを皆が理解したわけではなかった。

我々は指導部と絶えず係係をとるということが不可能となり、また事件が急速に進展しつつあることによって事態がますます緊迫したものになってきたので、間もなく私が武漢へ行き、南京で生じた事件について報告し、それに対する適切な指令を受取ることが

決定された。この出張の提案は顧問会議で採択されたものだった。何応欽は私を波止場まで送って来た。中国軍閥の伝統的な丁寧さに従って、彼は私にできるだけ早く帰って来るように言った。だが、1938年になってようやく再会することができた。その時、私は日本帝国主義侵略者と闘っていた中国軍の顧問団長であった。一方、何応欽は蒋介石の軍事部長の地位にまで昇っていた。

革命への裏切り行為

その後の事件を見ると、私は丁度いい時に南京を去ったようだ。さもないと、私は右派による、革命の大義に対するきたない裏切りを目撃することになったであろう。中路軍が上海に入った。そこは上海の労働者が何度か血を流して蜂起した結果、すでに軍閥軍から解放されていた。残念ながら、その後の事件はボロジンの先見の明のある予測と一致した。

蒋介石は中国における帝国主義の前線基地(上海)に到達し、強力な買弁グループにとり囲まれて、反動陣営に走った。1927年4月12日のクーデータの話は何度も語られてきた。従って、この事件を詳しく解説する必要はないであろう。

上海に到着した部隊を指揮していたのは広西軍閥の白崇禧であった。反動的傾向という意味では、彼は《蒋介石よりもっとゆるぎない》人であった。彼は杭州を占拠すると、ここで右派のみの国民党委員会を組織し、蒋介石が共産党員や左派との闘いで動揺し、一貫性に欠けていると彼を非難し始めた。大衆政治集会で、白崇禧は当然の反抗を受けたが、間もなく革命運動家達はまったく打ちのめされた。

反革命派が上海で権力を握るのはそれ程容易なことではなかった。そこには《5・30運動》の時、本格的な政治教育を受け、武装したピケ隊という形で独自の警備隊を持つ、強力なプロレタリアートがいた。白崇禧は先ず、国民革命軍の左翼の心情を持つ指揮官達を全て、前線に移した。上海を守っていたのは昨日まで孫伝芳の同盟者であった周鳳岐の部隊であった。労働者を武装解除するために、挑発とでっちあげという手段に訴えた。

《労働者》という言葉の書かれた腕章をつけた、雇われたならず者の一団が労働組合の事務所を襲った。その後に兵士達が事務所を防衛するためとか称して現われ、ピケ隊員の武装解除を要求した。ピケ隊の隊長が

拒否すると、労働組合本部に武器の引き渡しの許可を求めるためと称して彼を連行し、実際には銃殺した。これ及びこれに似た情景は漢口の中央評議会に送られてきた、上海の労働組合評議会の報告書の中には生々しく描かれている。その後、国民党員達はファシスト型の偽の労働組合をつくり上げた。その指導原理は労資協調であった。

4月12日のクーデターの後、上海で流血のテロが始まった。警備隊長ヤンフウは労働者に対する制裁に、信じ難いほどの厳しさを見せた。残念なことに、上海のプロレタリアートの反革命クーデターに対する備えは極めて不十分で、そのリーダー達は反動派に対して適時に抵抗を準備することができなかった。また退却するにしても組織的に行なうことができず、過度の損失を受けることなく地下にもぐりこむこともできなかった。

4月15日、国民党中央執行委員会及び中央監察委員会の右派の全員が南京に集まり、反動的な南京政府が樹立された。首席になったのは政治屋の胡漢民で、彼は廖仲愷殺害に関係した反動的なろくでなしであった。また外務大臣になったのは伍朝樞であった。

統一民族—革命戦線の枠内での長い闘争の結末は蒋介石のクーデターであった。この闘争は国民革命軍が成功し新しい土地が解放されていくにつれて、激化していった。革命陣営内の矛盾は階級的な深い根を持っていた。政治闘争は強力な大衆運動の高揚を背景に展開した。

大衆の目覚め

北伐の成功は革命勢力を急速に成長させる好条件をつくった。ボロジンが次のように書いたのは正しかった：《呉佩孚と孫伝芳を撃破し、国民革命軍は数千万、数億人の人民に、旧制度が滅亡の運命にあることを示し、革命の力を示した。中国における植民地、帝国主義体制が根ざしている基盤に反対する闘争に、極めて広汎な大衆が目覚め、かつそれを組織化する合図を北伐が送った》。

北伐はプロレタリアートの経済的、政治的闘争のさらなる成長を可能にした。それは何カ月にもわたる香港—広州のストライキの経験をすでに有している広州でも見られた。ここで、政治的な勢力の特別な組み合わせが形成された。北伐以前に革命陣営を構成していたのは労働者、農民、プチブル、ブルジョアインテリゲンチヤ、その他、非広東人の軍閥であった。つまり、

国民革命軍に加わった軍閥達—他の省の出身者—は広東における農民闘争の被害を直接には受けて、その闘争に寛容な態度をとった。そして当地のライバルの困難さのある程度、満足感さえいだいてながめていた。国民革命軍が北方へ去ると、広東には大衆に何も許そうとしない当地の將軍と士官が残った。一方、《中山艦事件》グループの大部分が広州からいなくなり、新たにリベラルな春を迎えた。

1926年11月から12月前半にかけて、労働者と経営者との間に一連の大きな紛争が起こった。ストライキを行なったのは印刷工、銀行員、大百貨店《Saint-Cyr》《Sainte-Compagnie》の店員、運転手、車夫等であった。ボロジンは次のように述べている：《中国の産業の後進性の故に、中国では本当のプロレタリアートの数はきわめて少ない。《労働者》という用語が通常、職人や商店主に対しても用いられた》。このことは広州の労働組合運動の状況にも見られた。ここには非常に多くの小さい労働組合があり、その中の大きいものは政治的傾向が全く千差万別であった。労働者の代表委員評議会はコミニストの影響下にあった。広東の労働者連盟は半同業者組合や零細企業主を統一した。一方、産業労働者が参加している機械工組合は全く信頼できず、反動的でさえあった。

北伐によって革命の新しいセンター—武漢のプロレタリアートは大いに目覚めた。漢口では労働運動がほとんどすべての工場で見られた。1926年10月～12月、武漢では、各企業の小さい争議は別にして150件以上のストライキが起こった。ストライキは外国の企業に劣らず中国の企業でも行なわれた。中国の企業の半分以上は零細な手工業や商店であった。労働者の要求はどのようなものであったか。採用と解雇はもっぱら労働組合を通じて行なうこと、賃金の引き上げ、衛生管理、保険、労働時間の短縮、労働者に対する態度の改善。組合は大部分の争議に勝った。ストライキに加わったのはタバコ工場労働者、紡績工、郵便局員、製革工、電気技術員、鉄道員、仕立屋、肉屋、造兵廠労働者、製粉所労働者、穀物倉庫労働者、電報局員、店員等々。広州でも武漢でもスト破りと闘うために、労働者ピケ隊がつくられた。

残念ながら、顧問達は当時、中国総工会が《まだ十分な権威を持たず、個々の組合は指示に従わず、その決議を実行しない》ことを認識せざるを得なかった。

当時の武漢に固有な経済状況の下でのストライキ運動には、避け難いマイナスの面があった：技術面でも

金融面でも極めて弱い中国の企業は労働者の要求の全てを満足させることはできなかった。零細企業の大量倒産が始まり、その結果、経済及び武漢政府の財政の混乱を引き起こした。大資本家達はこの状況を脅迫のために利用した。彼らは絶えず、労働者の《勝手気まま》に対して文句を言い、ピケ隊が自分達を捕え、手を縛り、頭に屈辱的な三角帽をつけさせて街路をひき回すと報じた。

湖北政治委員会の依頼によって、その委員の一人が状況を調査した。彼のレポートによると、労働賃金が多少上昇したのと同時に、《労使問題調整委員会》がつくられた。労働組合統一評議会は設立当初から、労働争議の資料で文字通り埋まった。だが、賃金の増大や労働者の生活改善の問題に関する具体的な決議を一つも採択しなかった。

指摘されているように、ストライキはまず第一に、中国にある帝国主義列強の企業やその市民に打撃を与えた。1926年12月、武漢の日本租界でボーイと苦力のストライキが起こった。ストライキと同時にピケ隊がつくられ、租界への食料品の搬入を阻止した。仲裁裁判所はストライキ参加者に有利な決定を下した。労働者達は中国における巨大な帝国主義国家の企業の一つ、米一英タバコ会社に強力な打撃を与えた。ストライキは賃金不払いを招いた。そこで、ピケ隊員は組合の名において会社の商品3~4千箱を没収し、売却した。帝国主義列強の領事達は労働者を抑えるよう当局に断固として要求した。

国民政府委員会は次のような決議を採択した：組合はまだ売り切っていない商品を返却すること。今後そのような手段をとらず、問題をすべて《調整委員会》及び外務省に委ねること。会社は労働者に総額1万ドルを援助すること。

帝国主義者—企業家はこの決議を敵意をもって迎へ、大量解雇という方法で労働運動を弾圧しようとした。中国の企業では、現地の規模としては極めて大きなものでも、ストライキの解決策はそれとは異なっていた。例えば、漢陽の兵器工廠では管理機関は労働者の要求をほとんどすべて受け入れざるを得なかった。

争議に対する政府の態度は独特であった。両者が同意の結果の確認のためにやって来た時、議長をつとめていた国民党員の徐謙は重々しく言った：《あなた方がこの点について同意しているなら、ここにいる必要はない。そのようにしなさい。我々の仕事を邪魔しないように》。他の政府委員は誰も全く自分の意見を述べ

ようとさえしなかった。

武漢政府は労働問題を真剣に解決しようという意志を示さなかったが、労働運動が活発化し、具体的に手が打てる場合にも、ほとんど何もしようとしなかった。

月毎に失業者の数は増大した。苦力、仕立屋、その他のプロレタリアートは政府の援助金を要請した。だが、資金はどこから手に入れることができたか。

1927年6月に国民党中央執行委員会政治局に宛てたボロジンの報告から、失業者の数がこの時には、武漢だけで17万~20万に達していたことがわかる。

プロレタリアートの状況は重苦しいものだったが、その指導者の中で冷静に考える者は次のような確信をいだいていた。事態を統一戦線の分裂の方向に向かわせるべきではなく、大衆を集め、活動的な革命のにない手をできるだけ早く養成するために、労働運動の合法性を絶えず利用すべきである。だが、武漢の全般的な経済状態は一日一日と、ますます破局的なものになっていった。帝国主義列強の会社は武漢政府を完全にボイコットし、武漢政府発行の金も受け取らなかった。武漢政府は銀の保有量が急激に流出すること、予算に大きな穴があくことから、銀貨の輸出禁止を導入させざるを得なかった。10万ルーブルを越えない額で上海への為替のみが清算された。このような現実の下では、武漢政府は大量の紙幣を発行せざるを得なかった。紙幣を発行する権利を有していたのは中央銀行である、《Bank of China》と交通銀行であった。最も流通している貨幣の偽造も大々的に行なわれた。その結果、1927年5月までに額面の15~25%が引き下げられた。

右派はインフレが武漢政府にとっていかに脅威となるかわかっていた。唐生智は武漢政府が成立した当初にすでに、中国共産党の指導者に語っていた：今や、張静江は国民党の議長でありながら、住民の意向を無視し、宋子文（財務大臣）を煽って紙幣をどんどん発行させている。彼は人民を愛していない。

急激な紙幣発行は労働者、ブチブル、商人、職人等にひどい打撃を与えた。武漢のブルジョアジーはますます蒋介石に注目し始めた。武漢全体にとってもブルジョアジーにとっても、主要な通商の動脈である揚子江の終着点、上海との安定した経済関係が最重要な問題であった。蒋介石が武漢に到着した時にすでに、大商人達は彼に先ず上海に進撃するよう勧めていた。また両替商達は労働運動に対して策を講ずるよう、請願を提出することさえした。蒋介石は揚子江下流に根を下ろし、封鎖することによって武漢を締めつけた一石

炭や医薬品でさえも揚子江を通して搬入させなかった。これは炎に油を注いだが、そのことがなくても、事態は絶望的になっていった。

ボロジンは政府の歳出を1ヵ月1千5百万ドル以上と見積もったが、実際に集めることができたのは百万ドルにすぎなかった。武漢に到着して3日後、国民党左派の指導者達は反革命分子の所有する不動産(建物、敷地)を没収したが、徹底さに欠けていた。当時の状況では、この財産を利用して政府の状況を改善する可能性はなかった。武漢は上海以外にも他の地域とも関係を保つ必要があった：原料を四川省と華南から、米を湖南から受け入れていた。しかし、これらの商業の関係はすべて断ち切られた。武漢の管轄下にある地域に莫大な量の軍隊が存在したことは、当地にとって耐え難い重荷となった。

湖南の地方政権自身が軍事支出に苦しんでいる時に、そこからの財政援助を期待できるはずはなかった。1926年12月すでに、その収入は月80万ドルで支出は140万ドルであった。

こうした状況はすべて、最初のうち国民革命軍の到着を歓迎していたブルジョアジーを離反させることになった。漢口と漢陽が解放された時早くも、唐生智は市の公園であらゆる階層の住民の代表者による集会を催した。商工会議所の代表は当時、国民革命軍のスローガンを支持していた：《死を恐れず、民衆を愛し、政府を愛し、金を愛すな》。最後の言葉を商人が言うと、本当に感動的に響いた。さらに彼は言った：《呉佩孚の時代は我ら商人にとって極めて苦痛だった。我々は彼に多額の金を払わねばならなかった。というのは、もし彼に金を払わなかったならば彼は我々を逮捕し、首を切った。大商人は税を払うことができたが、中、小商人にとって税は極めて重いものだった》。かくして、ブルジョアジーは武漢占領前に軍閥達によってひどく痛めつけられていた。その後、危機的な経済状況が発生したためにブルジョアジーは一層困難になった。

商人達は国民党の執行機関に、労働者が企業経営に

干渉しないこと、労働者が金持ちを罰するのを禁止することという請願書を提出した。大ブルジョアジーは工場を閉鎖し、事業を清算し、金を上海へ移すか外国銀行に預金した。上海へ銀を移送することはすでに1926年12月に始まっていた。

武漢政府が衛生規定を守らせ、市街交通を円滑にするために、露店商に一定の場所を割り当てた時、そのために《商人—プロレタリアート》は1927年5月、抗議文を提出した。彼らは決定された措置を拒否するか、あるいは、市の中央に屋根付きのマーケットをつくるよう呼びかけた。さもなければ、5万人の人間が絶望的な状況に立たされるであろう。同時に、商人達は紙幣から銅貨への交換を増大させるよう求めた（この点に関して労働者も彼らを支持した）。

ボロジンは武漢のブルジョアジーの立場全体を次のように概括した：《広州では、労働運動は香港のストライキで労働者が有利な立場に立ったことによって政治的に分裂し弱体化したブルジョアジーを相手にしたが、一方、揚子江流域では、労働運動は中国の主要な商業の大動脈を握っている、より強力なブルジョアジーとすでに衝突している。このブルジョアジーは労働者に反撃するために急速に組織化した。漢口の商業会議所が労働者側の法外な要求に対して出した、有名な11月の決議がその典型的な例と言えるだろう》。

1926年と特に1927年の中国における農民運動に関して、多くの研究がなされている。農村における高揚は大規模なものになり、革命の進行に大きな影響を与えた。私の持っている資料の一部を読者に提供しよう。

当時の農民の状況を唐生智のような軍閥がどう考えていたかを知るのも、興味深いことであろう。彼は言っている：《小作料は総収穫高の50%から75%の間にある。だが、さらに、我々の村には貧農にとって非常に苛酷な古くからの習慣が残っている。借金をして返すことができない場合、妻や子供を売るか、自ら奴隷にならねばならなかった》。